

ユニークな発想力と自分軸で 魂が望むことを生きる

脚本家
旺季志ずかさん

湘南の小高い丘に建つ淡い水色のアーリーアメリカンを思わせるご自宅のドアフォンを押すと、ピンクのショートヘアの小柄な女性が笑顔で迎えてくれた。

『女帝』、『正義の味方』、『カラマーズフの兄弟』『特命係長 只野仁』『屋根裏の恋人』など、数多くのヒットドラマを生み出す脚本家の旺季志ずかさん。

「脚本家になるとは思っていませんでした。子どもの頃は、テレビアニメを見て声優さんになりたいなど漠然と思っただけ。でも、調べてみると、身長が足りない。諦めました」

父は公務員、母は教師という阿南市の厳格な家庭に育った。富岡西高3年になり、進路を考えたとき、自分がどうしたいというよりも両親は大学進学を望んでいるだろうなと思うと、進学以外の選択肢を持たず、立教大学へ。

「今じゃ考えられないけど、自分の意志よりも、周りが私に何をしてほしいのか、何を期待しているのかを読んで、期待通りになるように行動してました。自分を押しさえて、人に迷惑をかけない、人に気に入られるような生き方をしてたんです。自分の感覚や、こうしたい、こうなりたい、という自分の意志を優先させることも、私が私が、と前に出ることも一

切なかったですね。どうすれば人気に入られるのかばかり考えてました」

実は高校時代に少しだけ役者に憧れたことがある。ただ、両親が望むのは演劇学校に通う娘ではなく、大学生活を送る娘だろうと思いい、役者の夢を一旦閉じた。

「でもバシヤールの本を読んでから、がらっと変わりました。もっとちゃんと自分を意識するようになったんです」

バシヤールとは、地球外生命体と言われる存在。「もっと自分を生きよう。自分軸で魂が望むことを生きよう。そう思うようになったんです」

意識して役者を目指し始めた。とはいえ、目指して勉強すればなれる職業ではない。名乗ることはできても、仕事がない。生活のため、あらゆるアルバイトを経験した。

「家庭教師、ウエイトレス、銀座のホステス、高層ビルのガラス清掃：50種類は下らないですね（笑）」

当時はインターネットで登録して簡単にアルバイトを探せる時代ではなかった。アルバイト情報誌から条件に合うバ